

第21回研修会講演②

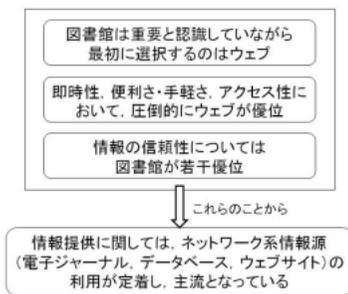
あらためて大学図書館のレファレンスを考える：問題提起にかえて

国立情報学研究所 米澤 誠

1. 学術コミュニケーションの変容

現代の学術情報コミュニケーションにおいては、会話・電話や会合などの身体系・通信系メディアからメール・テレビ会議などのネットワーク系メディア、図書・雑誌などの蓄積系メディアから電子ジャーナル・データベースなどのネットワーク系メディアへの移行が進展している。

これは、情報獲得行動にも変化をおよぼしている。近年の調査によると、図書館は重要と認識しているが、最初に選択するのはウェブ情報源であり、即時性・利便性・手軽さ・アクセス性において、圧倒的にウェブが優位となっている(図1)。



レファレンスサービスも変容をはじめ、比較的回答が容易で即答が可能な質問については、ウェブ上のレファレンス資料の利用で解決する傾向がある。一方、利用者がかかえる問題が重要で、その問題解決に中長期的な取り組みが必要な時は、図書館の情報資源を選択し、図書館の支援を求めるといった傾向がある。

2. 主体的学習とオープン教育

筆者が担当した大学の科目では、学生が主体的に学習できるような授業デザインを考えた上で、レポート課題が可能となった。これにより、大学生としての学習技能の習得が可能となった。この主体的学習とは、自立的に問題解決を行う図書館中心の学習といってもよい。このような課題発見型・グループ学習型の学習方法への志向は、主体的で双方向的なオープン教育として、わが国における大学教育の新たな潮流となりつつある。

3. 情報リテラシー教育としてのレファレンス

主体的で双方向的なオープン教育は、同じく自主的で発見型の能力を習得することが目的の情報リテラシー教育と軌を一にするものである(図2)。これからの情報リテラシー教育は、新入生ガイダンスやOPAC説明会のような受身的・一方的なものから、レファレンスやレポート作成の指導を通じた主体的・双方向的なものとなることを望みたい(図3)。

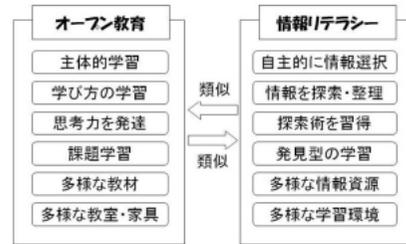


図2 オープン教育と情報リテラシー教育

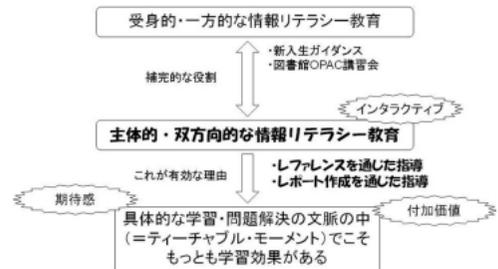


図3 情報リテラシー教育の方向性

今後は、特定の質問に対して情報や文献を提供したり、レファレンスコーナーに参考資料を置くだけの情報提供型レファレンスサービスから、情報や文献の提供を通じて、それらの探索法の指導を意識的に行うという学習指導型のレファレンスサービスへの展開が必要と考える(図4)。

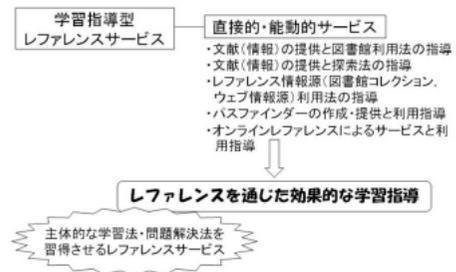


図4 学習指導型レファレンス

4. 明日のレファレンスのために：問題提起にかえて

学習指導型に転換するためには、どのような方策をとればよいのであろうか。具体的には、①大学生の学び方を知ること、②大学のカリキュラムを知ること、③そのカリキュラムに対応する資料を知ることという、三つの取り組みが重要である。まずはこの取り組みに着手することで、それぞれの図書館でのレファレンスの在り方を探ってほしい。